

でしょうか。

次の親神様からの宿題に移ります。大教会に下さった宿題は、お目標様のお戻しと8月に迎える創立110周年記念祭です。

今回18か所の教会のお目標様をご本部へお戻しさせて頂くことになりました。関係の会長さんや信者さんの気持ちを考えますと、心が痛くなる思いです。返したくて返す教会はありません。各々の教会が設立の時、会長さんとながる信者様方が、人生をかけて、まさに清水の舞台から飛び降りる気持ちで、神様一筋に凭れて、助けられた御恩報じを実行していこうと心に定められたことだと思えます。代を重ねられた教会もありますから、多くの方がその教会に真実を伏せこまれたでしょう。その教会がなくなると、寂しい気持ちが募ります。しかし、考えますと、その真実は、神様に対して、日々御恩をお返しし、神様に受け取って頂いているはずですから、そのお徳、尽くしたものは末代とお聞かせ頂きます。子や孫たちへと続いていくのだと思うのであります。

信仰は上級を通して、親神様・教祖につながっていることは、皆さんも分かっていることだと思えます。

増野鼓雪という方がおられました。大正から昭和にかけての方です。(本名は増野道興、ペンネームです。増野正兵衛先生の長男 明治大学卒 豊繁宣教所長、本部員、天理教校校長、敷島大教会長、増野鼓雪選集22刊、享年39歳)〈別科生にお話された一文〉を紹介します。

『われわれ人間の心と神様のお心との間には、理の通う道があつて、われわれの心をそのまま直覚できるに違いはない。ところが不幸にしてわれわれには理が通わない。これは、理の通う道に草が生えているからである。この心の草を刈り取って、道がどこにあるのかを求めてゆかねばならぬ。そうすればわれわれの心に、神様のお心が自由に通うようになつてくる。道を拓めるのも同じことで、人間から神様へ通づる道を、綺麗にすればよい。その道を通りて神様はわれわれに、自由の御守護をしてくださる。会長と喧嘩をして布教に出て、なんぼ

きばつたところで決して信徒はついてくるものではない。それは上級との理が切れているから、神様が働いてくださらぬのである。道を拓めるということは、信徒を属(つ)けることが第一義ではない。道をあけることである。神様との道、上級との道さえ明らかに付けておけば、信徒はひとりで後から従(つ)いてくる。道を通る者は親との道、会長との道、上級との道を、円満に付けておくことを、何より先にせねばならない。』(道友社編「教理録 信仰の炎」36ページ)

私は、この文章を読んで、感動しました。なるほど、と感じ入りました。何故、教会に上級につとめなくてはならないのか、それは、神様に通じる道が教会から上級、大教会へと道が続き、その先に神様への道が続いているのと。その道を通り安くなること。上級にお供えや身を運び、その先のおぢばに身を運ぶところに理が開ける、ということでしょう。

神様に通じる道を日々コツコツと積み重ねた先輩たちが、お付け下された網走の道。今、私たちは、当たり前顔をして、自分が苦勞したような顔をして通っておりますが、今一度、先人たちの苦勞の陰で我々が結構に通らせて頂いていることを思い直さなくてはなりません。

私は、長男の身上を通して、霊様方、先輩方の積んで下さったお徳は、今も私たちに常にお掛け下さっているということを実感しました。先人の方々に喜んで頂けるのは、末代に信仰をつないで行くことです。思い出します。お勤めをさぼる私にゲンコ張つて、おつとめをさせて頂くことが大切であることを仕込んでくれた母の心。

8月29日の記念祭まで、4か月半、コロナ禍の中です。当日は、おつとめや参拝者の参拝などどうなるかわかりませんが、110年のお礼勤めをつとめさせて頂くことが、記念祭の目的であります。私たち信仰者は、演奏家や舞踏家のプロではありません。うまく踊ること。うまく演奏することだけが、目的ではありません。

ません。つとめさせて頂く一人ひとりが、真剣に取り組み、心を一つにして勤めさせて頂くことが、大切です。当日に向けて、網走につながる者が、離れ離れで、おつとめの練習をしていまして、その努力する姿を一つひとつ親神様・教祖はご覧になって下さっていると、思います。

大教会長様は、今年1月の大教会春季大祭神殿講話で「本年1年は大教会にとって節目の年になりますので、まずはおつとめを第一に、月次祭のおつとめはもちろんのこと、毎日つとめる朝夕のおつとめを真剣につとめさせて頂く1年とさせて頂きたい。」とお話し下されています。

親神様からお与え頂いた宿題を解答して返答させて頂くことは、コロナを含める身上事情の解決を願うこと、大教会の記念祭に心を添えさせて頂くこと。これは、真剣にお勤めを勤めるといふことです。その結果、各教会や、信者家庭にも御守護頂ける喜びをお与え頂けると信じます。一人ひとりが信仰的な成人をさせて頂けるよう、記念祭に向けて努力させて頂きましょう。